東京大学哲学研究室『論集』33号（2014年度）
pp.48-61

ベルクソンとフイエにおけるオートマティスム問題

木山　裕登

ベルクソンは著作を準備する際、各著作に関連する科学の文献を大量に考察する。『物質と記憶』にとっては特に心理学が重要である。ところで、当時の心理学において人々の注目を引いた現象に、オートマティスム（精神医学の文脈では自動症と訳される）がある。例えば、事実と異なることを信じ込みそれに対応する一連の行為を展開する（何もない所に羊が実在すると信じてその様子や何をしているかを次々語る、農婦が自分を王女だと信じて王女に適した言動をとる）、普段思い出せない（多くは余りにショッキングな）過去に関する質問に対して催眠状態においてのみ答えられる、指定された日に指定された行動を意識せずにとる（後催眠暗示）、自分が何をしているのか意識せずに一連の複雑な所作や簡単な計算や質疑応答をしたり手紙を書いたりする、といった事例が観察された。被観察対象者は、複雑な所作や観念（羊や王女の観念）の展開、さらには計算や応答といった、様々な程度で知的と言えるような事を、あたかも自動機械が勝手に体を動かし知的振る舞いをしているかのように、意識から独立したところでなしている。

以上のような観察報告は、人間を機械に還元する唯物論的な立場、あるいは意識のようなものを認めるとしても偶有的な現象としてのみ認める立場にとって、ありがたいものだろう。人間は神経や筋肉の運動で説明でき、意識などと呼ばれるものは（あったとしても）実効的なリアリティを持たない。知的な振る舞いの根底には自動的な「機械」の作動を認めなければならないのであって、意識なき機械への還元に対する反証として知的所作を引きあいに出すことは最早できない。しかし、本当に非機械的・非物質的なものにリアリティを認めることはできないのか。人間に知的な自動機械という側面があることを認めた上で、いかにしてそこに還元できないロジックで働くリアリティを主張することができるのか。オートマティスムの観察からはこのような問題を取り出せる[1]。

この問題は『物質と記憶』のベルクソンの意識にもあった（MM91, 117）。では彼はそれにどのように取り組んだのか。こう問うと、直ちに純粋記憶や持続といった独特な概念が目を引くが、このことがベルクソン自身の議論の力点を見えにくくしてしまうと思われる。実際、とりわけこうした概念を用いて肯定的に何かを主張する際、ベルクソンは人の名前を明示しないことが多いため、あたかも科

学の成果を自らの論理で整理しゼロから自らの思想をくみ上げているように見えて、その実はむしろ、名前を挙げずに既出の概念や議論を反復していることもあるからである。ただし、そこには何かが少しだけ付け加えられている。そこにこそ、ベルクソン自身の主張の力点を見出せるはずだろう。それを明らかにするために、本稿では A. フイエという補助線を引きたい。フイエもまた、知性が自動機械的に働く事例を確証例として挙げられるような仕方で議論しており、ベルクソンに先立ってオートマティスムの提起する問題を引き受けていると言えるからである[2]。ただし、本稿で取り上げたいのは、両者が機械論に還元できないものとして何を主張したかではない（それだけなら簡単で、フイエは欲求（appétit）を、ベルクソンは純粋記憶や持続を、それぞれ主張したと言えばいい）。そうではなく、両者がそうした要素をどのようにして提出したのか、に注目したい。

以下本稿では、まずフイエの *La psychologie des idées-forces*, t. 1 を対象に[3]、彼が「観念連合」に関する議論を通じて「観念」をどのようなものとして捉えているのか、その際何が問題となっているのかを明らかにする（１節）。次いで、ベルクソンが同じ主題を扱う記憶論を確認し、フイエや心理学者の既存の議論や問題を引き入れつつもベルクソンが加えた論点が何であるかを明らかにする（２節）。

１．フイエにおけるオートマティスム問題：観念の実在性の概念

本節では、オートマティスム問題への応答という観点からフイエの思想を検討する。そのために、彼の観念の概念を考察したい。以下、観念とはどのように働くものであるのか、「観念連合」のメカニスムに関するフイエの議論を検討し（１．１節）、そのとき機械的な秩序に還元し得ないリアリティがどのように主張されるのか、何が異なる実在性を肯定するのかを明らかにしたい（１．２節）。

１．１　フイエにおける観念の働きの問題

ある観念が与えられた時、別のある観念が選ばれ喚起される。例えば、火を見て火傷が連想され、距離を取ろうと後退する。ここで、火に始まる一連の観念の選別と喚起はどのようなメカニスムによって生じるのか。

この問に対してフイエは、対立する二つの立場、即ち生理学的な機構に訴える立場と、判断し推論する理性（raison）に訴える立場との二つを提示する。

彼は後者を「意識のうちに特定の諸観念の継起をもたらす結合の力と、一度現れた諸観念に対して精神が下す判断とを、混同している」（Fouillée 1893, 211）と

して退ける。例えば類似の関係は、類似が見出されるであろう諸観念が既に連合し与えられた上で初めて、そこに明晰に認められるようになりうるものなのであって、諸観念間の関係に基づく判断によって連合そのものを説明することはできない。彼にとって、関係は関係付けられる項に先立たないと言えるだろう。

では、理性による関係の明晰な把握に先立って与えられているような、諸観念の「結合の力」とはどのようなものなのか。ここでフイエは、当時の（主に脳の活動部位に関する）生理学的知見に基づき、経験論的かつ機械論的な説明にある程度まで接近する。病理学的観察も示していた通り、特定の観念の選別と喚起のうちにはひとりでに働きうる自動性があるからである。本稿では、生理学的説明には深入りせず、そこから観念及びその連合に関するどのような概念が提出されることになるのかを検討したい。彼は次のように言う。

> 最初に、火との接触・火傷の感覚・後退する運動が共に存在したなら、諸感覚同士及び諸感覚とそこから結果する欲求的・注意的・運動的な反応との現実的な結びつきが、事実上（de fait）私に与えられているのである。［…］諸感覚と運動との結びつきは、一度自然な仕方で与えられると、脳内に交通路を残し、記憶内に存続する。結びつきが獲得されるのである。反復によって、習慣が火の表象と火傷の表象との結合を強め増加させ、脳のある仕方での振動から別のある仕方での振動への移行を容易にする。（Fouillée 1893, 324-5）

フイエにとって「火や火傷の観念が経験時に共存していた」という点が重要である。なぜなら、まさにそのことによって、精神の内に観念間の結びつきが与えられていることになるからである。諸観念の共存の経験が「思考と行動の方向」（Fouillée 1893, 345）を生み、その結果、火の観念が思考を火傷の観念へと方向付けるようになる。同じ経験の反復は特定の方向付けの力を強め、反証となる経験はその力を弱める。重要なのは、この方向付けが、「火–火傷」の観念が与えられるのと同時に、観念そのものに内在するものとして与えられるという点である。

このとき観念は、その観念が持つ力の向く方向に従って、流れ落ちる水が一度ついた溝の線に従うように自動的に展開することになる。こうして与えられる一連の観念は、もし現前するのがそれらだけであるなら、精神の全体を占め、客観的なものと区別されえなくなる。しかし実際は、特定の諸観念だけが存在することは少なく、感覚と記憶に由来する無数の観念が、各々の力を行使し、現前している観念に抵抗したりそれを補強したりする[4]。再認ないし馴染み深さの感情の有

無は、喚起された観念と新たに与えられた観念との衝突の有無に他ならない。

> 我々の行動がすっかり出来上がった路を流れるのが感じられる。我々の思考が、それを受け入れる準備の出来上がっている枠に出会うのである。［…］再認とはしたがって、何よりまず、少ない抵抗を伴って行動することの意識なのである。（Fouillée 1893, 242）

フイエの言う馴染み深さの感情が意味しているのは、このように、我々の行動がすっかり出来上がった路を流れていくこと、喚起された観念と新たに与えられた観念とが衝突し抵抗し合うことなく、むしろ後者に調和する方向で観念の喚起がなされるようになることに他ならない。再認ないし馴染み深さの感情には、観念の機械論的側面だけからでは計れない側面もあるのだが、それについては後で触れるとして、今はフイエが、観念の働きを、観念自身が持つ、一連の諸観念を方向付ける様々な程度の「力」（あるもの同士は衝突し抵抗し合い、別のもの同士は補強し合う）の競合と見なすという点を指摘するにとどめたい。

観念の働きを観念自身に内在した諸力の結果とする見方は、精神による自由な働きによるかのような結合（例えば雲や木目の中に様々な動物や人の顔等を見出す場合）にも維持される。実際、表象が意識されること＝知覚（perception）を、それが判明な意識に入ること＝覚知（aperception）から区別し、後者は精神の自由な注意の働きによるとするヴントに対して、フイエは次のように述べる。

> 通常の観念連合の法則から解放された自由な「覚知の行為」に由来する特別な結びつけというものなどはない。観念を注意によって意志的に方向付けることとは、観念の恒常的で内的流れを別の諸観念の流れに合流させ、電気誘導現象において生じるように、これら諸観念がある方向付けを被るようにすることに他ならない。（Fouillée 1893, 265）

ここでも、観念連合が可能であるためにフイエが要請するのは、諸観念を一定の方向へ流れさせる力を自らに内在しているものとしての「観念」だけであって、観念を超えたものによる結びつけの力能は不要である。

１．２　フイエにおける非機械論的な原理と実在の構成

ここまでのところ、フイエは機械論的立場に近い。というのも、既に簡単に触

れたように、フイエにとって、諸観念間の関係は、その概念の明晰な保持に先立って、関係が把握されることになる諸観念と共に（関係付けの力として）与えられているのであって、反省的思考はというと、それを抽象し際立たせるもの、連合の働きにとっては後から付け加わる偶有的なものに過ぎないからである。加えて、火と火傷、馬と羽の関係付けは、観察主体が作り出すものではなく、与えられ被られるものであって、これらの観念間の運動は外部から課されたものという性格を有しているだろう。既に触れたように、オートマティスムの観察をフイエが確証例として挙げることができるのは、諸観念間の関係付けにおける知的な働きには機械論的な秩序と異なる構成要素が必要ないと彼が考えているからである。

では、観念の働きは自動機械的なものに尽きるのか。諸観念間の関係だけを問題とする限りはそうも見える。しかし、観念の起源の一つである感覚に注目すると、話が変わる。というのもフイエは、感覚について、外界からの刺激による受動的な変様でしかないものとしては理解できず、それと「意識の自発性」との相互作用として初めて理解可能になると考えるからである。

フイエは、感覚が感覚器官の構造に依存する点に注目し、進化論的な議論を引き合いに出した上で、生物としての「関心」や「欲求」が感覚的質の決定にとって本質的であるとの議論を提示する。

> 正真正銘の、連続的な、第一義的な意識とは、したがって欲求（l'appétit）のそれである。[…] あらゆる刺繍の真正なる一様な緯糸とは、存在そのもの・行動・意志へと執着し、あらゆる障害の只中で自己を維持しようとする、充足した有り様（bien-être）の連続的な意識である。まさにこの生存と行動との根本的な感情に対する関係において、我々はあらゆる感覚を分類するのである。（Fouillée 1893, 251）[5]

生物は自らの充足に固執するものであり、そのために生存に有利なものや自らの欲求を満たすものを獲得し、そうでないものを退けようとする。感覚とはその手段として発達したものに他ならない。こうした由来からして、感覚が与える観念は、欲求に応じて切り取られることでそれとしての形をとることに加え、快不快をはじめとする感情とそれに基づいた反応行動とをも様々な程度で伴うのでなければならないことになる。「太陽に関する私の感覚は、太陽を表象するものでも、太陽のコピーないし描写でもない。それは太陽に対する情念と反応の手段なのである」（Fouillée 1893, VIII）。我々は外界からの無数の作用のうち、例えば温度を

識別して感覚するが、適温には心地よさが、過度の暑さ寒さには苦痛が伴い、それに応じて移動などの行動をとる。感覚は、単なる受容で終わるのではなく、それに続く思考の方向や身体運動まで本質的なものとして含んでいる。だからこそ、感覚の有無は生物の生存を左右しうる[6]。感覚の決定にとって識別・感情・反応行動という三つの不可分な要素が本質的であり、それらは主体の欲求・関心に応じた仕方で構成されているとフイエは考える。

フイエが以上のような議論を取り上げるのは、感覚が主体の欲求に基づいて決定されるものであるという点が、観念の非機械論的な側面、機械に還元できない「意識」の側からの自発的な働きを示していると考えるからである。前節で見たように、諸観念間の関係付けを検討する限り、観念の働きのうちには経験に由来する機械論的運動以外のものを構成的な要素として要請する必要がないようにも見える。しかし、観念が感覚を通じて与えられる場面においては、生物としての各主体が自らに固有の欲求に応じた仕方で観念を規定しているのである[7]。

ただし、前節で見た、観念間の関係を生じさせる内在的な力の議論をフイエが放棄するわけではない。なぜなら、彼は欲求に由来する観念は外的運動や機械論的秩序に還元できない秩序を持つとしながらも、欲求を超観念的なものとみなすのではなく、むしろそれも観念の「力」と見なすからである[8]。実際、先ほど少し触れた「馴染み深さ」ないし「再認」について、フイエは次のようにも述べる。

> 私が再認するのは私が期待していたものである。どんな内的衝突も、どんな打ち勝つべき抵抗も、ないということだ。［…］起源において、再認の感情は欲求の充足そのものに包まれていたのである。［…］母乳を吸う子供は、その度に新たな感覚と過去のイメージとの合致を感じる。(Fouillée 1893, 245)

空腹などの感覚は欲求に従って母乳の観念を喚起する。このようにして「期待されたもの」が、「新たに与えられたもの」と齟齬をきたす場合、自らの期待を満たすために乗り越えなければならない障害としての抵抗が感じられる。欲求はこのように、外的運動とは異なる秩序において観念の働きを決定する力、観念の運動に変化をもたらしうる力の一つなのである[9]。欲求は、観念を方向付ける力の一つとして、あくまで観念–力という平面上に位置付けることのできるものとして、提出されていると考えられる。

観念の働きを観念に内在するものとしての力によるとする以上の議論は、フイ

エの観念－原子論批判でもある。観念を原子のように個々独立したものと見なす場合、それら自身の内に他の特定の観念との連合の理由が見当たらず、観念以外のところ（例えば推論する理性）に連合の原理を求め、それがなぜ観念連合に有効なのかを示さなくてはならなくなる。しかし、フイエにはこのような問題は存在しない。関係は観念に内在しているはずだからである（意識なき知的機械であるかのような観察事例は、この前提を確証するものであった）。彼にとって問題となるのは、観念が、我々や我々を取り囲むものに対して、どのような実効性（efficacité）をもつのか、という問題である（Fouillée 1893, intro., v）。観念が物質的・機械的な秩序に還元し尽くされ得ないリアリティを持っていると言えるためには、非機械論的な仕方で何らかの変化をもたらす実効性を示さなければならない。そこで、感覚という場面を取り上げ、欲求という生命的な原理が支配している秩序を示すことで、自動機械には還元できない観念の側面があぶり出された。こうしてフイエは、あくまで観念の運動の中で、非機械的な秩序に従う運動はあるかを問うという方法で、非機械的なリアリティを求めたのである。

２．ベルクソンにおけるオートマティスム問題：記憶の実在性の問題

フイエとベルクソンの間に多くの共通点があることは明らかだろう。特に関係するのは記憶力の理論である。本節ではその概要を確認し（２．１節）、彼が何を付け加えたのか、彼自身の力点はどこにあるのかを明らかにしたい（２．２節）。

『物質と記憶』第二章でベルクソンが記憶の二つの形式を区別したことは有名である。心理学の歴史を描く際にも、ベルクソンのこの区別に言及することが少なくない[10]。暗誦課題の例で言うと、暗記された課題文を自動人形のように諳んじることを可能にする身体習慣的な記憶と、一回一回の暗唱練習の情景の想起を可能にする記憶（純粋記憶の概念につながる）との区別である。この区別を記憶の保存という観点から述べると、前者が、反復によって身体のうちに構築される運動機構として過去を保存する身体的習慣的な記憶であるのに対して、後者は、過去の全てを身体からは独立に保存する「純粋記憶」である。また、記憶の再生という観点から述べると、前者は同じことを同じ順序で同じ時間をかけて行うもので、課題文の暗唱や馴染みの日用品に対する組織化された運動的反応等を例として考えられるのに対して、後者の純粋記憶からはそのうちのいくつかをイマージュの形で想起することができ、例としてひとまずは過去の特定の場面の想起を念頭においておけば良い（MM84-7）。

２．１　習慣的記憶の概念

習慣的記憶は運動的記憶とも呼ばれ、その働きは「瞬時の再認」（MM100）において見出される。それは、「いかなる明示的な記憶内容が介入することもなしに、身体のみで可能な再認」（MM100）であり、「表象ではなく行動に存している」（MM100）。このように言うからといって、咳やはっと身を躱すといった単純な反射運動だけが念頭に置かれているわけではない。「病理学的諸事例の観察は、オートマティスムがここで、我々が考えているよりも遥か遠くにまで及んでいることを明らかにしている」（MM91）。ベルクソンは、その多様性を示すために、日常的状況から心理学的・生理学的・病理学的議論で取り上げられる状況（例えば、見慣れた街を歩く時や日用品を使用するとき、ことさら過去の経験を思い起こそうと努力することなく、半ば無意識的、自動的に身体を適切に動かすことができる。あるいは、習慣的記憶の機能不全の例として、目を閉じて住んでいた街の情景を想起しそれを描くことはできるのに、いざその町に入ると適切な方向へ移動できない、といった観察事例）まで、様々な例を大量に引き合いに出す（MM99）。その要点は我々の見るところ次の二つである。（1）知覚はそれに後続する運動と切り離せない、（2）運動は一つの全体として組織化され定着してゆく。

（1）知覚と身体的運動が不可分であるという主張は『物質と記憶』第一章の基本命題の一つだが、こうした主張自体は新しいものではなかった。リボーの報告によると、生理学が心理学の分野に浸透するにつれて意識状態における運動の重要性が注目されるようになり（Ribot 1879, 371）、「心的生の基礎には、いたるところに常に運動がある」（Ribot 1879, 384）ことが示された。例えば、声を出すことなく課題を暗記するよう命じられた子供が、視覚的知覚に対して発音の運動を密かに付随させているというベインの観察が引き合いに出される。「［神経］中枢に伝達された運動が何らかの形で外部へ放出されないということはあり得ない。したがって、あらゆる心的状態が傾向であり、そのあとには運動が続くとしても、なんら驚くべきことはない」（Ribot 1879, 384）[11]。リボーは既に、感覚印象の受容は知覚的意識状態の一部でしかなく、それに常に後続する運動もまたその本質的な構成要素なのであって、それを含めた過程を研究しなければならないとの考えを導入していたのである。「運動へと引き継がれ（se prolonger）ないような知覚は存在しない」（MM101）と述べるベルクソンはこの点を受け継いでいる。

（2）そうした運動は、反復によって次第に複雑な運動体系へと組織化されていく。発話を聞き取ることができている時、聴覚的印象には、語を分節化し発声するための口や喉の筋肉運動が後続している[12]。さらに、一つの語の発音は一連の

運動から成っている以上、幾つかの運動が連帯して後続するのでなければならない。耳慣れない言語が反復によって聞き取れるようになっていく過程とは、ひとまとまりの全体としての運動を組織化し、それと印象との連結を定着させることに他ならない（MM120-8）。こうして、印象に後続する一連の身体的運動が組織化・定着・自動化することで、精神的な努力なしに「馴染み深さ」（MM101）の感情を伴うある種の再認が可能となる。反対に、知覚に後続する反応運動が定着していない場合、言い換えると多様な選択の可能性が開かれている場合が、馴染みのない状態、瞬時の再認がなされない状態ということになるだろう。

> 構築中の機構は、既に構築された機構と同じ形で意識に現れることはできないだろう［…］。［それらの違いを意識に示すものとは］、先行する運動の中における後続する運動の先形成であって、この先形成のゆえに、部分が潜在的に全体を含んでいることになる［…］。それゆえ、どんな日常的知覚も組織化された運動を随伴している以上、日常的な再認の感情は、この組織化のうちに根を張っていることになるのである。（MM102）

以上のような仕方で習慣的記憶を提示するベルクソンの念頭にフイエがいることは明らかだろう。実際、この箇所に付した注で、ベルクソンはフイエの名前を挙げ、「彼は馴染み深さの感情は、大部分、驚きを構成する内的衝突（*choc*）の減少からなっていると述べた」（MM103, n. 3）と指摘している。前節で見たように、フイエの言う衝突の減少が意味しているのは、観念が自らの力に従って流れていく方向に対して抵抗する別の流れがなくなること、流れていく方向が決まってしまっていることに他ならない。これだけなら、フイエの言う「馴染み深さ」と、ベルクソンの言う（印象に後続する組織化された運動の定着としての）「馴染み深さ」とは、似通っているという印象を受ける。

しかし、オートマティスム問題における当の議論の位置付けを考えると、その印象には疑問が生じると考えられる。というのも、ベルクソンはここで、まだ機械的運動機構の枠内から脱していないからである。フイエは、欲求を指摘することですでに脱していると考えた。確かにベルクソンも、『物質と記憶』第一章から、すでに生物としての「必要（besoin）」や「利害関心」に基づく作用の選別を取り上げ、これによって物質的実在とその知覚が区別されると述べる（MM31-3 等）。しかしベルクソンにとって、ここにあるのは程度の差でしかなく、生物としての関心が「精神」の独立した実在性を示すものとして指摘されたわけではない。

ベルクソンのこの無理解は、非機械論的な側面にリアリティがあると言えるために何が必要かという点で、フイエとの間に差異があることを示している。フイエにとって、そのために必要とされるのは、観念の実効的な働き方における秩序の差異であった。そして、ベルクソンが欲求で十分としなかったのは、まさにリアリティの区別に関するこのような理解を受け入れないからと考えられる。

ベルクソンが機械論的運動から決定的な仕方で脱し、身体からは独立した精神の実在性を示すために持ち出すのが[13]、記憶、それもここまでで述べた身体習慣的記憶とは区別されるもう一つの記憶、純粋記憶の概念である。

２．２　純粋記憶の概念の問題

習慣的記憶が身体機構の形で過去を蓄え、行動として発動するのに対して、純粋記憶には「我々の精神が、流れ去った生の情景をその全ての細部に至るまで保存」（MM272）しており、それによって例えば過去のある出来事をイメージの形で思い浮かべたりすることが可能となる。ただしベルクソンは、この記憶の働きを、知覚と想起されるイメージとの連合という形では理解できないと考える。彼の観念–原子論批判である。その要点はフイエと近い。観念やイメージを、各々が自らだけで自存する原子的な実体と見なすと、それらを連合する力を観念以外の所に求める必要が生じ、連合主義はそのために類似や近接（や対照）を主張するが、これらによる関係付けに基づく形では、特定のあるものが他でもなく特定の別のあるものと連合する理由を十分説明できない。しかし、そもそも観念を自存する実体として捉えるべきではなく、よって観念外の関係に求める仕方で問を立てるべきではない（MM181-5）。こうした批判が本稿にとって重要と思われるのは、それが機械的秩序に還元できない精神のリアリティを求める方法に関わるからである。

そこで取り上げるべきが純粋記憶の概念である。しかしベルクソンは、記憶が働くプロセスを細かく説明しない。それどころか、それは心理学の仕事だとして、自分でしようとさえしない（MM189）。では彼が自ら主張すべきと考えた論点はどこにあるのか。例えば次のように述べられる際、力点はどこにあるのか。

> すると、現在の知覚が代わる代わる異なる記憶を喚起するとして、それは知覚が不動のままで自らの周りに次第に多くの要素を引き寄せ、機械的に付加することによってではない。それは、我々の意識全体の膨張によってであり、意識はより広い表面に広がることで自らの目録をより豊かにする。（MM184）

> 記憶の全体は、現在の状態からの呼びかけに対して、同時に生じる二つの運動によって応える。その一方は並進運動（translation）で、それによって記憶はその全体が経験へ向かって進み、分割されることなく、行動のために様々な程度で収縮する。他方は自転運動（rotation）で、それによって記憶はそのときの状況の方を向き、最も有用な面をそこへ提示する。（MM188）

過去の記憶の全体が現在の状況に応じようと働く。そのとき記憶の働きは、原子状の観念の付加ではなく、意識の膨張や収縮として考えられるもので、全体のうちの有用な一部だけが実際に意識されることになる。こうした記述を見ると、記憶のすべてが現実化しようとする力ないし傾向を有しており、現在の知覚や主体の態勢と調和するものだけが意識されそれらと衝突するものは除外される、と考えられているかのようである。実際、記憶全体のうち役立つものが顕在化するといった記述もある[14]。するとベルクソンは、諸観念の力に基づいてその働きを理解するフイエの思想を、有用性という観点を強調しつつ、受け継いでいるかのように見える。しかしながら、ベルクソンにはフイエに還元できない論点がある。それは、周知の通り、彼が知覚と記憶との差異を程度の差としては理解しないという点である。純粋記憶は、そこにおいて過去のすべてが保存されていると言われるが、しかしそれは弱まった知覚の総体でも、過去の情景そのものの総体でさえもない。というのも、過去に関するものであるとはいえ、イメージの形で既に想起され意識のもとに呼び出されてしまっている以上、それは記憶であることをやめ、感覚ないし知覚の性格を帯びた現動的（actuel）な状態となっているからである[15]。純粋記憶は、過去の表象の想起が可能であるために必要だが、それそのものとして意識的に表象することはできないようなものとして、現動的な表象と単に形式的に区別されるのではなく根本的に異なった仕方で在るべき「潜在的」（MM142, 269-70）なものとして、概念化されている。

とはいえ、意識はアクセスできないにも関わらず保存されている記憶があり、その現実化を現在へと参入する範囲の膨張・収縮とみなす、というだけなら、ピエール・ジャネが既に病理学的観察に基づいて論じていた[16]。ベルクソンがそれを知っていたことは、純粋記憶の働き方の病理学的確証例として、ジャネの論じる「系統的健忘症」や「逆行性健忘症」の事例が引き合いに出されることからも明らかである[17]。ジャネは、心理学的生はお互いある程度独立した多様な諸要素からなっており、人格の一性は精神によるそれらの統合・体系化の結果にすぎないとした[18]。精神のこの統合の能力が減弱すると、心的諸要素の内の一部がひと

つの意識へと統合されなくなり、結果意識野は狭窄（rétrécir）し、排除された要素は通常の意識に上らない下意識の領域に残ると考えた[19]。これにより、ヒステリーや人格の二重化といった心的病が統一的に説明できると考えられたのである。

しかし、ベルクソンにはジャネに回収されない点がある。それは、記憶の全体が現在の知覚へと分割されることなく向かい、そこに「入り込んでいる」(MM184)、「現前している」(MM191)、という点である。ジャネは、非意識的な下意識という領野を含めた心的領野全体のうち、意識の光が照らすことのできる領野が増減する、と考えるのに対して、ベルクソンは意識されないものも含めた記憶の全てが現在の状態に常に入りこんでおり、かつその一部だけが意識される、と考えている。一部と全体という語があるものの、それをジャネのように単純な範囲の広さの違いといういわば水平的な差異だけで考えることはできないだろう。そう考えると、「全体が入り込んでいる」という点を無視してしまうからである。ではベルクソンにおける「現在の記憶に入り込んでいる記憶の全体」と、「意識されるそのうちの一部」との間にはどのような関係があるのだろうか。

２．３　ベルクソンにおける意識的事実の構成の問題

ベルクソンが純粋記憶に関して「無意識的」(MM156-66）という言葉を使う箇所に注目したい。彼はそこで、意識を現在作用する実効性をもつ心理学的状態として、無意識を作用しない無力な心理学的状態として、定義する（MM156-7)。これだけなら、意識されない記憶とは、現在作用しない、何の効力もない仕方であるものということになり、ジャネと変わらないように見える。注目したいのは、ベルクソンが少し後で、「意識の本質は認識にあり、偶有的にのみ行動に関わる」と考えるときに生じる錯覚について、次のように続ける箇所である。

> 人は意識について、たとえそれが身体の諸機能と結合していても、偶有的に実践的なのであり、本質的には思弁に向いている能力だと主張する。そのときには、意識は純粋認識のためのものということになる（serait à la connaissance pure）のだから、意識が保持している認識を取りおとすことで意識に利益があろうとは考えられないので、意識が、完全に失ったわけではないものを明らかにするのを断念する、ということも不可解なことになる。そのときには結果として（D'où résulterait)、意識が事実上保持しているものだけが意識に権利上属すこととなり、意識の領域において、実在的なものとは全て現動的（actuel）なものということになる［…］。(MM157)

意識が認識を本質とすると考える場合どうなるかが、条件法で述べられている。その場合、意識が保持していたものを断念して無意識の領域におとすことは考えられない（反対に、意識の本質が実践的能力であると考えるなら、意識は保持していたものでも有用でなくなった認識を断念するということは十分理解可能だろう）。重要なのは、ここからの帰結が、「意識が事実上保持しているものだけが意識に権利上属すこととなる」という点である。意識が保持している認識を放棄することがなく、断念もしないなら、意識が事実上保持しているものと権利上それに属するものは一致するが、意識を実践的なものと考えるなら（そしてベルクソンはこう考える）、事実上のものと権利上のもの、現動的なものと実在的なものとは一致しない。ベルクソンはまさにこのようにして、事実上意識が保持しているものとは重ならない、現動的でない記憶のリアリティを確保しようとしている。

ここに注目したのは、ここで権利と事実の対概念を用いて純粋記憶全体と現動的なものとの区別について述べているからである。純粋記憶とは、権利に関わるものなのである。したがって、それは、事実上成立している意識状態、ベルクソンの言葉で言うとイマージュとなっているものから抽象したり、それと形式的な相違（判明性であれ強度であれ）しかないものとして扱かったりすることは、許されない。ベルクソンが、知覚と水平的に並べて知覚との衝突を問題にするというようなフイエ的な議論を受け付けない理由は、権利問題としての記憶が事実上の現動的な感覚や観念を支配しているからという点に求められるのではないか。

この点こそ、『物質と記憶』が心理学ではなく哲学の問題として考えようと試みたことに他ならない[20]。しかし、もちろんベルクソンは、「アプリオリな演繹」を行っているわけではない。では、「経験の条件」を「アプリオリな演繹」とは異なる仕方で求めることができるのだろうか。以上はベルクソンとカントの対決を見極める手掛かりとなるのではないかと思われる。

本稿は科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

[1] シャルコーにおけるこの問題に関しては江口（2007）の特に第三、四章参照。オートマティスムは他にも人格の一性／多数性の問題に関わる。例えば Janet 1889。cf. 杉山 2013, 196-99.

[2] Fouillée 1893, 181, 209-19, 240, etc.

[3] この書の出版は『物質と記憶』に 3 年先立つ 1893 年だが、その内容の多くは論文の形でさらにそれ以前に発表されていた。

[4] 例えば、初めに羽のある馬の観念を与えられた小さな子供にとってはそれが馬に関わる真実となるだろう。しかし、次第にそれと衝突するような諸観念が十分与えられると、馬–羽という方向付けの力が弱まり、羽と馬の観念の連合を疑うようになる（Fouillée 1893, 332-3）。

[5] 『物質と記憶』も、事実上の意識のあり方を規定するものとして欲望（désir, besoin）を指摘する。この概念を軸としたフイエとベルクソンの比較研究としては、高山（1959）参照。

[6] cf. Fouillée 1893, 7-8, 238, etc.

[7] cf. Fouillée 1893, 279.
[8] Fouillée 1893, introduction, IX-X, XVIII-XXI.
[9] cf. Fouillée 1893, 307.
[10] cf. Nicolas 2003, 7-10; Carroy, Ohayon et Plas 2006, 105; Gallois 1997, 15, etc.
[11] ここの「傾向」とは「単なる運動の継続（continuation）」（Ribot 1879, 384）のことである。
[12] 彼は失語症の観察例をその確証例として引き合いに出す。「これら［失語症の観察が示す］諸現象は、聴覚的言語印象が分節化された発音の運動へと引き継がれる傾向、［…］正常状態では聞き取られた発言の顕著な特徴の内的反復として現れる傾向を、証言している」（MM125-6）。
[13] cf. MM74, 76-7, 265, 271, etc.
[14] MM103-4, 156, etc.
[15] cf. MM149-51, 156, 270.
[16] cf. Charcot 1892, 83-5, 93, Janet 1893, 114-6.
[17] MM188-92. cf. Janet 1893, 83, Azam 1881, 137-40, 307-8, etc.
[18] cf. Janet 1894, 275.
[19] Janet 1889, 364.
[20] cf. CII 356.

［参考文献］

Azam, Eugène. 1881. « Les troubles intellectuels provoqués par les traumatismes cérébraux », in *Archives générales de médecine*, février 1881, 129-50, 291-315.
Bergson, Henri. 1896. *Matière et mémoire,* «Quadrige», PUF.（MM）
———. 1959. *Œuvres,* PUF.
———. 1972, *Mélanges*, PUF. (M)
———. 1992. Cours II, PUF. (CII)
Charcot, Jean M. 1892. « Sur un cas d'amnésie rétro-antérograde probablement d'origine hystérique », in *Revue de médecine*, douzième année, 1892, 81-96.
Carroy, Jacqueline, Ohayon, Annick et Plas, Régine. 2006. *Histoire de la psychologie en France*, La Découverte.
Fouillée, Alfred. 1887. « La sensation et la pensée selon le sensualisme et le platonisme contemporains » in *Revue des deux mondes*, Bureau de la revue des deux mondes, 398-425.
———. 1893. *La psychologie des idées-forces*, t. 1, Alcan.
Gallois, Philippe. 1997. « En quoi Bergson peut-il, aujourd'hui, intéresser le neurologue? », in *Bergson et les neurosciences*, Galloy et Forzy (éd), Les Empêcheurs de penser en rond, 11-22.
Janet, Pierre. 1889. *L'automatisme psychologique*, L'Harmattan.
———. 1893. *L'état mental des hystérique,* t. 1, Harmattan.
———. 1894. *L'état mental des hystérique,* t. 2, Harmattan.
Nicolas, Serge. 2003. *Mémoiree et conscience*, Collection Cursus, Armand Colin.
Ribot, Théodule. 1879. « Les mouvement et leur importance psychologique », in *Revue philosophique de la France et de l'étranger*, t. 2. 371-386.
江口重幸. 2007. 『シャルコー　力動精神医学と神経病学の歴史を遡る』, 勉誠出版.
杉山直樹. 2013. 「意識の他者／他者の意識」, 『思想』, 岩波書店, 2013年4月, 181-206.
高山峻. 1959. 『イデ・フォルスの哲学』, 中山書店.